安全各論⑫

刃物と安全

佐久間　宣吉
日本連盟事務局
山中野営場勤務

野外では刃物を使う機会が多いものです。今日、野営用具や携行食品の改良・進歩、キャンプストーブの普及、野営場の整備具合などにより、その必要度は低くなってきているとはいえ、まだまだ刃物は野外生活には無くてはならない道具であるといえます。

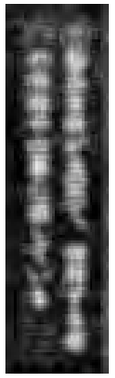
金に飽かしたコレクションならいざ知らず、刃物は道具である以上、何らかの仕事を行わせるためのものです。そしてその過程で、以下の事柄をスカウトたちが身につけることを期待するものです。それは、集中力、責任感、安全感覚、器用さと野外センス、自然保護の感覚などです。

刃物を使用する際、最も重要なのは無理なく安全に、仕事を成し遂げることです。さらに素早く、上手にできるなら申し分ありませんが、安全を確保するためには、十分に技術を高めておく必要があります。ともかく、安全に刃物を使用するには、次の事柄に常に気を配るべきでしょう。

A　良い刃物を使う。
B　正しい使用法を身につける。
C　使用条件を整える。

それでは、右の各項を一つずつ検討していってみましょう。

A　良い刃物を使う



手入れが行き届き、手に馴染んだ自分自身の刃物や班の物をいつでも使用し、人の物や野営場の備品などは極力使わないようにします。隊備品などを新たに購入する際は、使用する者に合ったサイズと重さ、バランス、形状の物を選び、材質にも注意します。さらにナタやアックスなら刀身と柄の接合方法、ホールディング・ナイフなら刀身を止めているピンの太さにも気を配りたいものです。スカウトが個人用の刃物を購入するときは、指導者がアドバイスしてあげるべきでしょう。

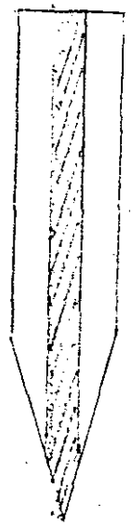
ところで、最近では皆さん、高価なナイフをお持ちのようですが、なかなかそれを使いたがらず、いざ必要が生じると人の物を借りて済ませているという話を聞いたことがあります。あまりに高価で、もったいなくて使えないということでしょうか。しかし、これでは宝の持ち腐れというものですし、手に馴染んだ物を使うという原則からも掛け離れています。良い刃物とは、高価な物を意味しません。価格も品質の目安とはなりますが、それも程度問題です。さらに体格や技量で、良しとする基準さえも異なってくるのですから、慎重に選んだ一本を自分自身の良い刃物としていくことこそが大切といえるでしょう。

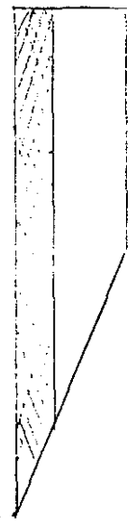
いずれにしても、良い製品であるということは重要で、劣悪な品質が原因の破損やゆるみ等によるケガは、絶対に避けねばなりません。

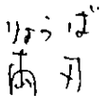
昔から、鋭い刃物は安全であるといわれています。良く切れる刃物は、無用な力を加えなくてもよいことからコントロールが効き、また切ろうとするものをしっかりと捕まえて滑りにくいからです。どんなに高価な刃物でも、切れなければ持つ価値が無いばかりか、むしろ恥といえます。スカウトの刃物とは新品同様に保たれている物ではなく、徹底的に使い込まれ、研がれて刀身が擦りへっていても、錆一つなく、鋭い刃がつけられている、そういったものであるべきです。

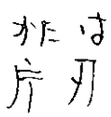
高価な刃物を持っているのに、砥石を持っていないという人が意外に多いものです。刃物を持つ者は必ず砥石も持つべきで（人造砥石で十分）、班・隊備品としても荒砥と中砥くらいは用意すべきでしょう。そして、それぞれの刃物についての正しい研ぎ方を知り、刃物を研ぐことが個人はもちろん、班や隊の習慣になるくらいまで十分に練習させたいものです。

刃物はまた清潔にしておくことも大切で、これは錆の防止だけでなく、ケガをした場合の感染防止としても意味があります。ホールディング・ナイフでは、刀身が収まる部分にゴミを溜め









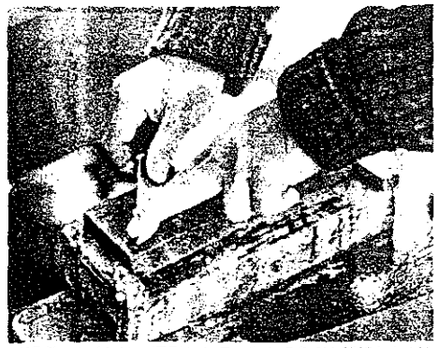
やすく、不潔になりがちなので注意を要します。（写真①②）

刃物を良い状態に保管することは、使用時の安全確保の上で重要です。手入れ・保管上の第一のポイントは、錆させないことで、ふつう、刃物は錆やすい鋼でつくられているため、とにかく水気を断つことが大切です。また酸や塩分を含んだものを切った後は、必ず水洗いしてから水分をよく拭きとり、その後、鉱物油などを塗布します。

個人の所有物はともかく、班や隊備品の刃物はとかく手入れや保管が疎かになりがちです。去年の夏の終りに収納したまま一年が過ぎ、さて今年もシーズン到来という段になって取り出してみると、一面のサビ、といった経験は無いでしょうか。刃物に限らず、隊や班の備品は、少なくとも一、二か月に一度は点検し、整備すべきです。

刃物の長期保管時には、空気中の湿気さえも問題となります。刃物の鞘の素材は湿気を取り込みやすく、また鋼を錆させる成分が含まれていることもあります。そこで長期保管時には鞘に入れず、グリースを塗ってサラシなどの綿布で巻いておきます。保管場所は風通しが良く乾燥していて、出し入れのしやすい所にします。点検時には手入れだけでなく、破損やゆるみもチェックし、補修しておきます。

①

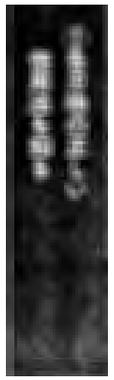


段研ぎのナイフは、柄側から切っ先まで角度を維持しながら一気に研ぐ。

②

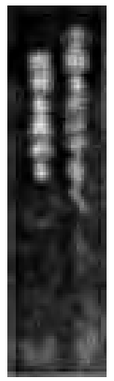
アックスは砥石を動かして研ぐ

B 正しい使用法を身につける

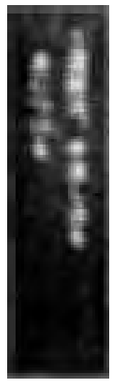


各刃物には、それぞれに正しい使用法があります。刃物によるケガのほとんどは、その基本的な技術を身につけていないために起こっています。現行のスカウト関係書籍には、刃物の使用法についての説明がほとんどありませんが、機関誌の関係記事や一般書籍なども参考にして、正しい使用法・取り扱い方を、スカウトたちにしっかりと身につけさせることが大切です。

野営場管理者としての経験からいえば、刃物による大きなケガは早朝によく発生しています。まだ目覚め切っていない頭と体で、マキを割ったりするのが原因のようです。これを防ぐには、前日に翌朝の焚きつけを用意し、テント内に確保しておくことです。これで時間と安全はかなりの度合で確保でき、またマキはよく乾燥していて、すこぶる火つきが良いという次第です。



最近、野外生活の技術を単に知識として扱うだけで、十分な実技練習が行われていないように見受けられます。また危険を伴なうものについては、単にそれを行わないことで危険を回避してはいないでしょうか。野外生活の技術は、レベルを高めなければ役立たないものが多く、特に危険の伴うものは、熟練することによって初めて安全を確保することができるのです。またその段階に至って初めて、技術の裏にある狙いが、スカウト個々の身につくことを期待することができるのです。

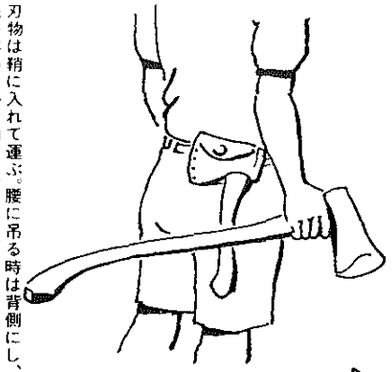


刃物によるケガは、使用時ばかりでなく、運搬時や手渡すときにも起きます。それは普通小さなケガで済んでいますが、大ケガとなる可能性があります。例えば抜き身のナタやアックスを手渡す際、足の上に落とすとか、持ち歩いているときに転ぶとかすれば、非常に危険なことは想像するだけで理解できます。正しい運搬法・手渡し法を指導し、実践させることです。（イラスト①②③）

C 使用条件を整える

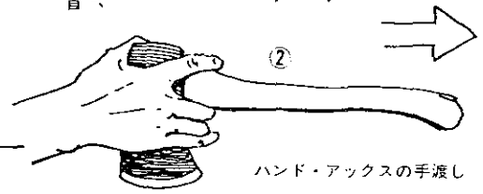
①他者への通告と監視

①



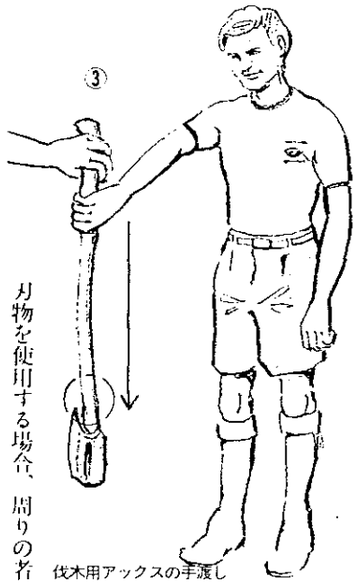
▶刃物は鞘に入れて運ぶ。腰に吊る時は背側にし、刃先を体の中心に向ける。抜き身のアックスは首部をしっかり持ち、刃先をやや外側に向ける。

②



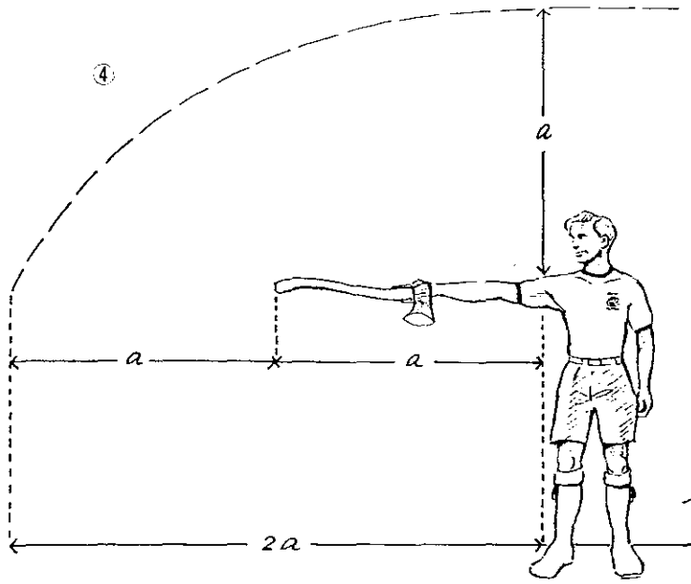
ハンド・アックスの手渡し

③



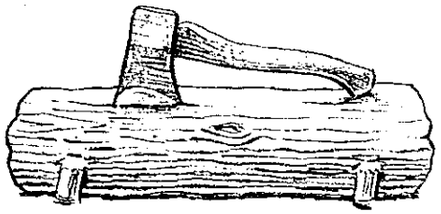
伐木用アックスの手渡し
刃先を外向き、下側に、まず柄の端部を受け、手を首部まですべらせて、しっかり握る

④



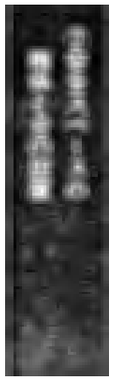
▲自分のぐるりを2a、上方にaの範囲をきれいに片付けておき、だれも近付けない。

⑤



◀アックスを丸太に打ち込む時は、柄の端部を上げない。

刃物を使用する場合、周りの者に声をかけて、これから刃物を使用する旨を通告する習慣をつけたいものです。また、設営のためにヤブや下草を刈るときなどは、皆が熱中してしまうと非常に危険な状況となることがあります。指導者の一人を監視の役に立たせ、全体の安全を確保するようにします。



野営サイトでは、作業場を定めてロープで囲い、大型の刃物はそこでのみ使うようにします。広さは、ナタやアックスを持って両手を水平に上げたときの二倍以上にします。①と同様、大勢の人間がいっしょに生活するようなキャンプでは、このような予防処置をとっておくことが賢明です。またマキ割りなどの作業台として、太目の丸太や切り株を囲いの中央に据え、クイでしっかりと固定しておきます。これで仕事のしやすさと安全を確保し、刃先を破損から守ることができます。（イラスト④）

野営サイトは、どこもきれいに片づいていなければなりませんが、特に大型の刃物を扱う前述の作業場は、整理・整頓しておくべきです。通常、刃物類は所定の工具置場に納めておきますが、使用途中のアックスなどは、柄の端が台の上面に触れるように打ち込んでおいてもよいでしょう。刃物を抜き身で放置しておくと、恐ろしい結果を招くことにもなりかねません。刃物類の整理・整頓は習慣となるまで完全に指導する必要があります。（イラスト⑤）

刃物と安全についていろいろと書いてまいりましたが、誌面の関係で実技については触れることができませんでした。これはまた、別の機会に扱いたいと思います。刃物は確かに危険なものではありますが、それ以上に私たちにとって無くてはならない道具です。危険ばかりが強調され、敬遠されれば、かえって潜在的な危険を増すことになります。正しい使用法と取り扱い方を身につけさせることで、この有用な道具をスカウトの友としていただきたいと思います。